

# 通常の学級と通級指導教室の学びをつなぐ実践

～「子どもの学びをつなぐ」「教師がつながる」視点から～

栗東市立教育研究所 研究員

松田 愛

## I 主題設定の理由

通級による指導は、平成5年度から制度化され、学校教育法施行規則第140条及び141条に基づき行われている。当時、通級による指導を受ける児童生徒（以下、「対象児」とする。）は全国で12,259人であった。その後、対象児は増加の一途をたどり、令和元年度では134,185人（児童生徒全体数の約1.2%）になっている。通級指導教室は、平成29年度では、小学校に4,399校、中学校に809校、特別支援学校に75校、計5,283校に設置されている。また、高等学校においては、平成30年度から指導が開始されている。

同様に、滋賀県における対象児は、令和3年度では1,852人（うち小学校児童数が1,476人、中学校生徒数376人）であり、通級指導教室の数は100教室まで拡充している（滋賀県教育委員会、2021）。

栗東市では、通級指導教室を「ことばとまなびの教室」と呼び、市内で5つの学校（葉山小学校、治田小学校、治田西小学校、大宝東小学校、葉山中学校）に設置されている。本市における対象児も増加しており、令和2年度では129人が通級による指導を受けていた（栗東市教育委員会、2022）。

通級による指導の目的は、障がいによる学習や生活上の困難の改善・克服を目的として、児童生徒のニーズに応じて指導を行うことにより、その指導の効果が通常の学級における授業や生活において発揮できるようにすることである。通級指導教室での専門的な指導が生かされるためには、通級による指導の担当教員（以下、「通級担当者」とする。）と、通常の学級の学級担任（以下、「学級担任」とする。）や保護者との連携が重要である。

しかし、国立特別支援教育総合研究所（以下、「特総研」とする。）（2018）は、学級担任と通級担当者の連携の課題として、小・中学校ともに「情報交換・情報共有の機会設定に関する課題」が最も多く、次いで小学校では「指導の連続性やPDCAサイクルに基づく適切な支援に関する課題」、中学校では「人的環境に関する課題（本人、保護者を含む）」などを挙げている。具体的には、小・中学校ともに、通級による指導の指導内容を学級担任が把握したり理解したりすることが不十分であることや、対象児について担当者間での共有が難しい現状が挙げられた。

そこで本研究では、通常の学級と通級指導教室の指導の連続性に焦点を当て、学級担任と通級担当者の連携の実態と課題を明らかにする。そして、その課題を解決していくために「教師がつながる」視点から両者の連携の在り方を提案し、通級による指導の指導内容を通常の学級での授業や生活に生かしていくことで、「子どもの学びをつなぐ」実践を進めたい。

## Ⅱ 研究の目的

- (1) 通常の学級と通級指導教室の指導の連続性に焦点を当て、学級担任と通級担当者の連携の実態と課題を明らかにする。
- (2) 通級による指導の指導内容を通常の学級での授業や生活に生かしていくことで、対象児の学びをつなげていくための担当者間の連携の在り方を提案する。

## Ⅲ 研究の仮説

学級担任と通級担当者が密に連携をとることで、通級による指導の指導内容が通常の学級での学習面や生活面で生かされ、通級指導教室と通常の学級の対象児の学びがつながっていくだろう。

## Ⅳ 研究についての基本的な考え方

### 1 「通級による指導」とは

「通級による指導」とは、小学校、中学校、義務教育学校、高等学校又は中等教育学校の通常の学級に在籍する比較的軽度の障害がある児童生徒に対し、その障害の状態に応じて特別の指導を行う教育形態である。指導の場は、「通級指導教室」等の名称で学校に設置されていることが多い。

通級による指導の対象は、言語障害、自閉症、情緒障害、弱視、難聴、学習障害（LD）、注意欠陥多動性障害（ADHD）、肢体不自由、病弱及び身体虚弱の児童生徒である。

通級による指導の形態は主に3種あり、対象児が自校の通級指導教室に通う「自校通級」、他校に設置された通級指導教室に通う「他校通級」、また通級担当者が対象児の学校を訪問して指導を行う「巡回指導」がある。

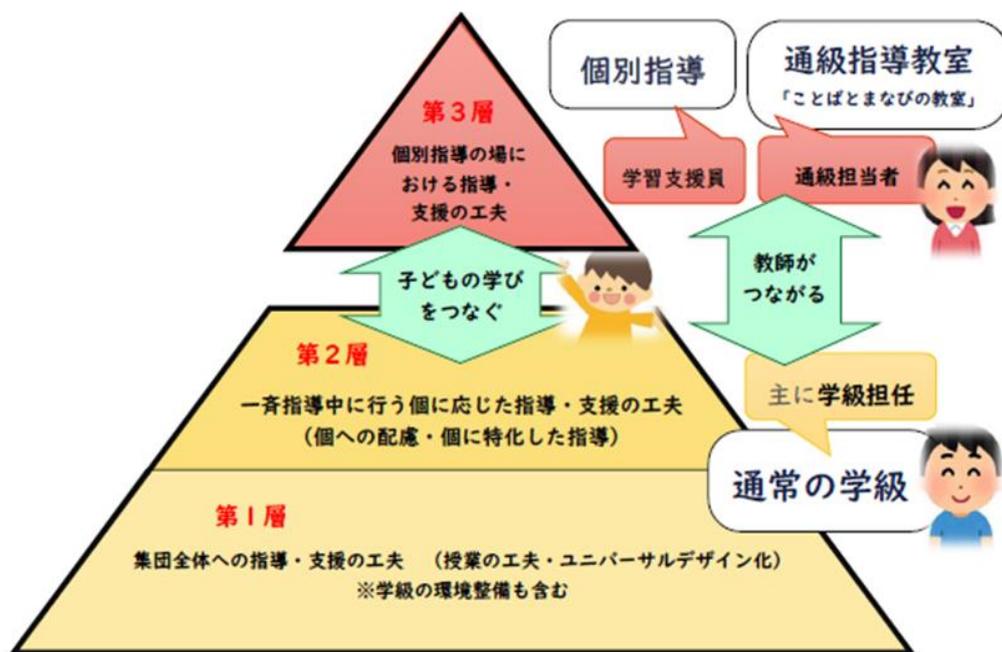


図1 滋賀県教育委員会（2019）『特別支援教育の視点を生かした授業づくりヒント集』を基に筆者が作成

## 2 学級担任と通級担当者の連携

「連携」とは、本来はつらなり、つながる様子のことである。そこから転じて同じ目的を持つ者たちが互いに連絡をとり、協力し合って物事を行うことを表す。滋賀県教育委員会（2019）は、通常の学級における特別な支援の必要な児童生徒への指導・支援の階層性を図にまとめ、通級による指導等を「第3層：個別指導の場における指導・支援の工夫」と位置付けた。その図を参考に、学級担任と通級担当者の連携の視点から、図1のように整理した。第3層に位置付けられている通級指導教室「ことばとまなびの教室」と、第1層および2層に位置付けられている通常の学級での指導をつないでいくためには、学級担任と通級担当者の連携が欠かせない。つまり、教師同士がつながり、密な連携を図っていくことにより、通級指導教室と通常の学級の指導の連続性がうまれ、それぞれの場での対象児の学びがつながっていくのではないかと考える。

## V 研究の方法

研究期間を2年間（令和3年度～令和4年度）とし、本研究の2つの目的について、以下の方法で研究を進める。

### 1 研究の方法と内容

1 年次 （ 令 和 3 年 度 ）	研究の目的
	（1）通常の学級と通級指導教室の指導の連続性に焦点を当て、学級担任と通級担当者の連携の実態と課題を明らかにする。
2 年次 （ 令 和 4 年 度 ）	研究の方法
	調査Ⅰ：栗東市内教職員への質問紙調査 調査Ⅱ：通級担当者への面接調査 調査Ⅲ：通級指導教室の授業及び通級担当者会の参観 ○3つの調査より明らかになった栗東市内の実態と課題を整理し、課題を改善していくための方策を検討する。 ◎1年次の研究のまとめ、2年次の研究計画を立てる。
1 年次 （ 令 和 3 年 度 ）	研究の目的
	（2）通級による指導の指導内容を通常の学級での授業や生活に生かしていくことで、対象児の学びをつなげていくための担当者間の連携の在り方を提案する。
2 年次 （ 令 和 4 年 度 ）	研究の方法
	○1年次の研究で明らかになった課題を改善していくための方策について、研究協力校にて実施・検証を行う。 ○次の2つの視点から検証を進める。 ①「子どもの学びをつなぐ」視点 担当者間がつながることで、通級指導教室及び通常の学級での子どもの学びがつながっているか。通級による指導及び通常の学級での対象児の観察。 ②「教師がつながる」視点 質問紙調査及び面接調査を行うことで、方策の実施による学級担任及び通級担当者の変容、担当者間の連携の変化について検証する。 ◎2年次の研究のまとめを行う。

## 2 1年次の研究経過

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
研究の方法・内容	研究内容の検討・計画 文献等による	調査項目の検討	教職員質問紙調査実施	→		調査の整理及び分析	→		通級担当者面接調査実施	→		2年次研究内容の計画
			担当者面接調査実施	→			通級指導教室の参観	→		研究発表大会にて報告		
			情報収集									

## VI 研究の結果及び考察

### 調査 I : 栗東市内教職員への質問紙調査

#### 1 調査の内容

学級担任と通級担当者の連携の実態と課題を明らかにすることを目的として、質問紙調査を実施した。調査内容は、以下の通りである。

- (1) 調査対象者 : 栗東市内 9 小学校及び 3 中学校の教職員
- (2) 調査方法 : 質問紙調査 ( G o o g l e F o r m )
- (3) 調査期間 : 令和 3 年 6 月 7 日 ( 月 ) ~ 令和 3 年 7 月 30 日 ( 金 )
- (4) 調査内容 : 教職員の属性、通級による指導に関する内容  
通級担当者との連携等

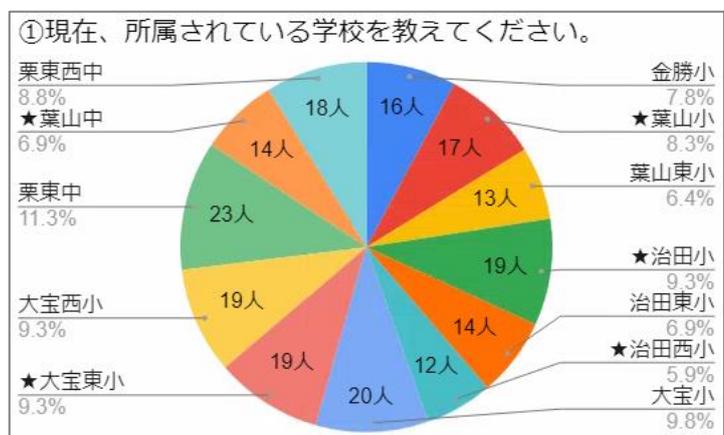
#### 2 結果及び考察

質問紙調査では、204 名 ( 回収率 47.7% ) の教職員から回答が得られた。

##### (1) 教職員の属性および通級指導教室に関する質問内容について

###### ① 所属している学校について

回答が得られた 204 名の教職員の所属校について、図 2 にまとめる。小学校の所属が 149 名、中学校の所属が 55 名であった。また、通級指導教室が併設されている学校の教職員は 81 名、その他の学校が 123 名であり、通級指導教室が併設されていない学校 ( 他校通級や巡回指導 ) からの回答を得ることができた。



★ : 通級指導教室が併設されている学校を示す

図 2 質問紙調査に回答した教職員の所属

②教職経験年数について

図3に、204名の教職経験年数について示す。どの教職経験年数の層からも回答を得ることができた。



図3 質問紙に回答した教職員の教職経験年数

③特別支援学校共有免許状の有無および特別支援学級の担任経験の有無について

204名の教職員のうち、特別支援学校教諭免許状を有している者は34名、有していない者は170名であった。また、特別支援学級の担任経験がある者が54名、ない者が150名であった。

④通級指導教室への入室経験の有無について

204名の教職員のうち、通級指導教室への入室経験があると回答したのは146名、ないと回答したのは58名であり、全体の約3割が入室の経験がなかった。校種別にみると、小学校では22.1%、中学校では49.1%が入室の経験がないことが明らかになった(図4)。

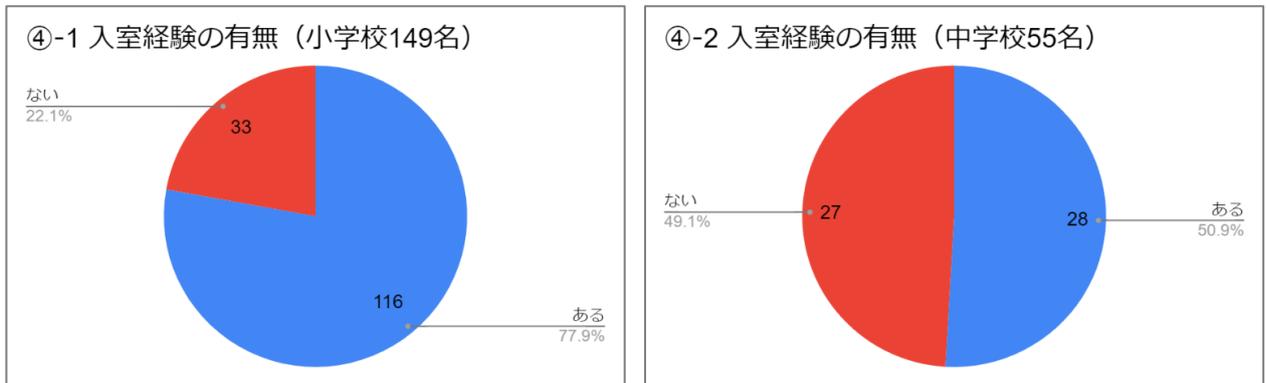


図4 小学校及び中学校教職員の通級指導教室への入室経験の有無

⑤通級指導教室の授業参観の経験の有無について

204名の教職員のうち、通級指導教室の授業参観の経験があると回答したのは124名、ないと回答したのは80名であり、全体の約4割が参観の経験がなかった。校種別にみると、小学校では27.5%、中学校では70.9%が参観の経験がないことが明らかになった。また、通級指導教室が併設されている学校では73.9%が参観の経験があり、併設されていない学校よりもその割合が高いことがわかった(図5)。中学校において、参観の経験がない教職員が多いことや、通級指導教室が併設されていない学校の参観経験が半数である現状が明らかになった。

通級担当者は、特別支援教育に関する専門的な知識を有しており、通級指導教室内の教材・教具や、掲示物等の環境設定、また実際の指導の様子から学ぶ機会

をもつことは、全教職員の特別支援教育に関する意識の向上に大変有効であると考ええる。

特に、市内の中学校においては、平成 29 年度に通級による指導が開始されてから 5 年目であり、今後、通級指導教室への理解がますます進んでいくものと期待される。

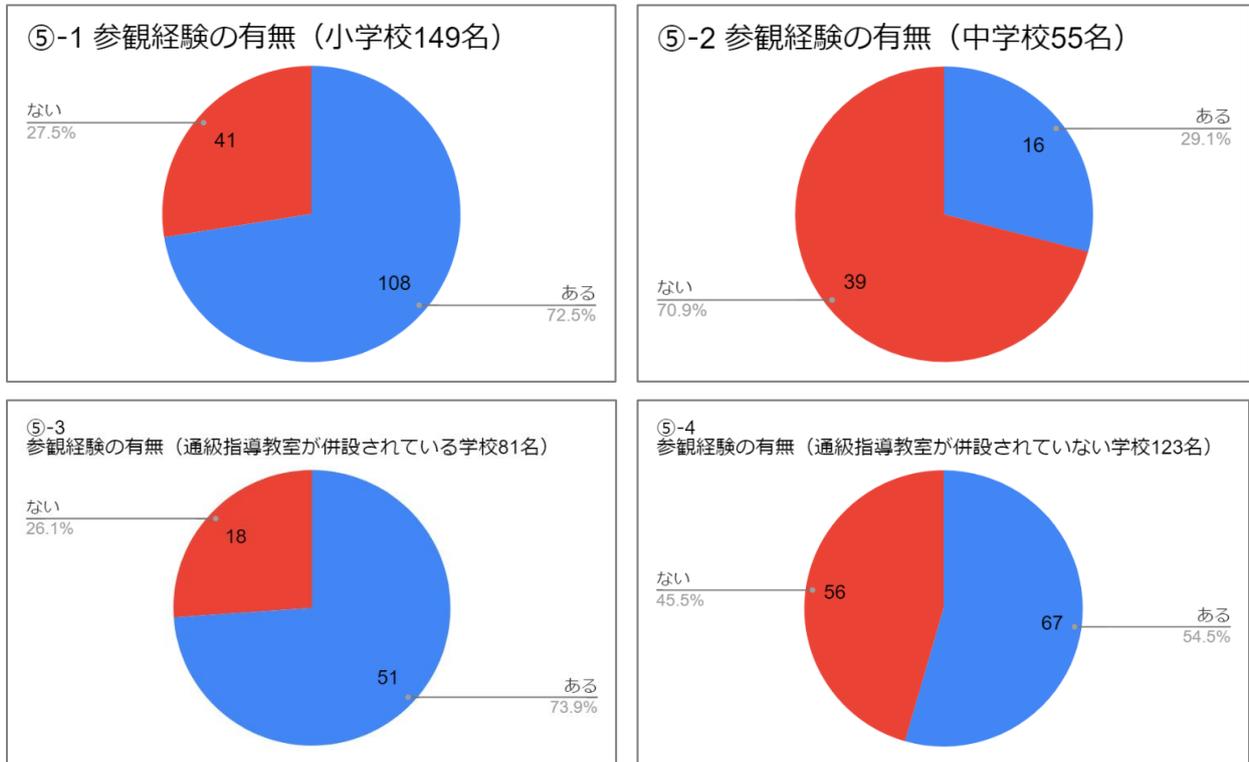


図 5 通級指導教室の授業参観の経験の有無

### ⑥ 対象児の担任経験の有無について

204 名の教職員のうち、これまでに対象児を担任した経験があると回答したのは 144 名、ないと回答したのは 60 名であった。全体の約 7 割が対象児の担任経験があり、これまでに担任した対象児の人数は、図 6 の通りである。

また、今年度、対象児を担任している学級担任は 54 名であった。その内訳は、小学校所属が 46 名、中学校所属は 8 名であった。また、自校通級をしている対象児の担任が 29 名、他校通級が 12 名、巡回指導が 13 名であった。

54 名の学級担任からの回答をもとに、以下、(2)において、本研究の目的である「学級担任と通級担当者との連携」の実態と課題を明らかにしていくこととする。

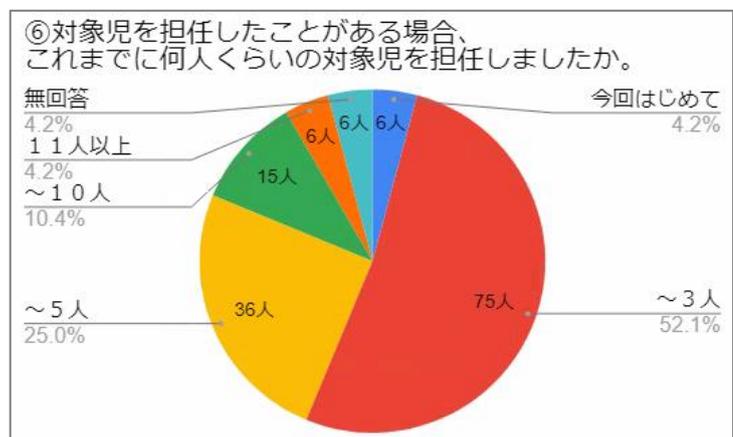


図 6 担任経験のある対象児の数

## (2) 対象児を担任している学級担任への質問内容について

### ① 通級による指導の指導内容の決定について

結果を図7に示す。

通級による指導の指導内容は、通級担当者のみで決定しているという回答が最も多かった。また、8名の学級担任は「わからない」と回答した。

特総研(2018)は、通級による指導の指導内容の決定に学級担任の関与がなく、通級担当者が中心となり決めている傾向が高いことを報告している。

本市においてもその傾向が感じられた。しかし、学級担任が通級による指導の指導内容の決定に関わっている現状もみられ、そのほとんどが通級による指導の形態が、自校通級と巡回指導となっている学校の学級担任であった。このことより、学級担任と通級担当者が直接会って話す機会がもちやすい自校通級と巡回指導では、学級担任が通級による指導の指導内容の決定に関与しやすい現状があるのではないかと考えられる。他校通級の学級担任が、通級による指導の指導内容の決定に関与していく方法について、今後検討が必要である。

通級指導教室での指導内容を通常の学級での生活や授業に生かすためには、学級担任がその指導内容や対象児の様子を把握し、通常の学級で生かすという視点をもって通級担当者と連携を図る必要がある。そして、通級による指導の指導内容の決定に学級担任が積極的に関わったり、その指導内容を把握したりする視点をもつことが、今後の課題である。

### ② 通級指導教室へ送り出す時・迎え入れる時に心がけていることについて

結果を図8に示す。

対象児を通級指導教室へ送り出す時や、学級へ迎え入れる時に、「いってらっしゃい」や「おかえり」などと対象児へ言葉がけを行っている学級担任が約7割を占めていた。次いで、「通級指導教室での授業開始時間を意識して送り出す」という回答が多くあった。

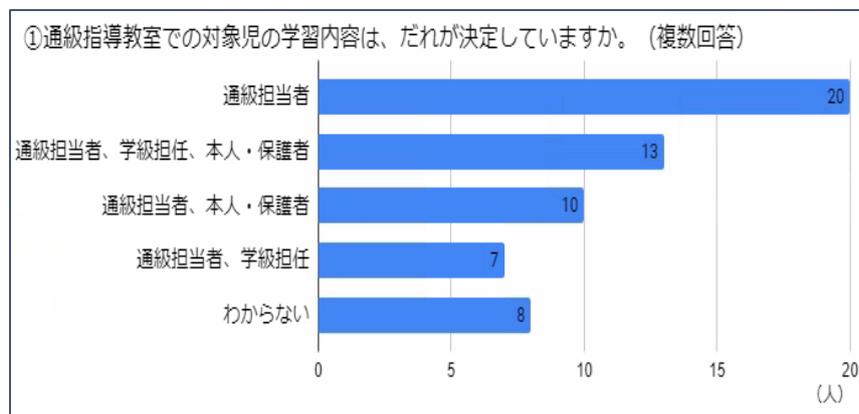


図7 通級による指導の指導内容の決定者

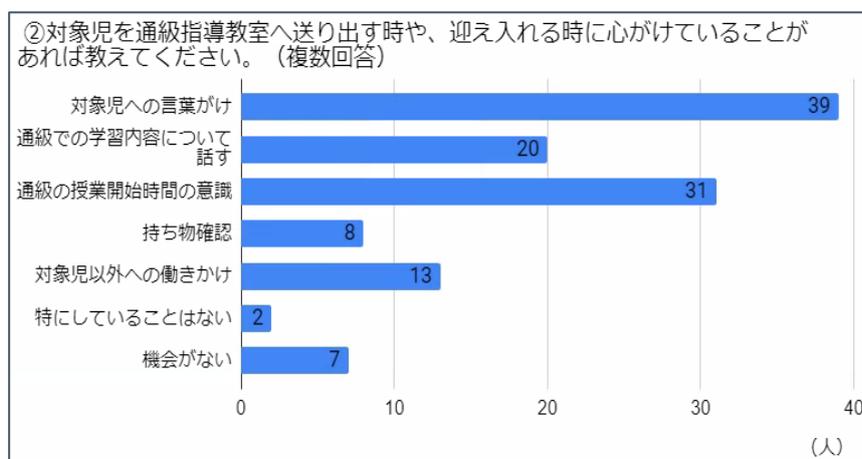


図8 学級担任が対象児を通級指導教室に送り出す時や学級に迎え入れる時に心がけていること

一方、「通級指導教室での学習内容について話す」という学級担任は、4割以下であった。「通級指導教室で〇〇を学習するみたいだよ」と言って送り出したり、「通級指導教室でどんなことをしてきたの?」と対象児に通級指導教室での学習内容について確認したりする学級担任が少ない現状が見出された。本研究の目的である、通級による指導の指導内容を通常の学級での授業や生活に生かしていくためには、通級指導教室での指導内容を学級担任が対象児と共有したり、一緒に振り返ったりする必要がある。通級指導教室への送り出しや学級への迎え入れは、通級指導教室と通常の学級の「子どもの学びをつなぐ」ための接続部分であり、その接続部分への学級担任の関わりは重要であると考えられる。

その他に、他校通級の対象児を担当している学級担任や放課後に指導を受けている対象児を担当している学級担任からは、「送り出したり、迎え入れたりする機会がない」との回答があり、子どもの学びをつなぐための接続部分に学級担任が関与できない現状もあることがわかった。

### ③ 通級担当者との連携方法について

結果を図9に示す。

学級担任が、対象児について通級担当者と連携をとる方法として最も多かったのは、「直接会って話す」ことであった。その他には、紙面、電話、回覧レポートやメールなどのツールを通して連携を図っていることも明らかになった。また、5名の学級担任が「話す時間や機会がない」と回答した。業務多忙な中、学級担任が通級担当者と直接会って話す時間の確保は、容易なことではないと推察される。

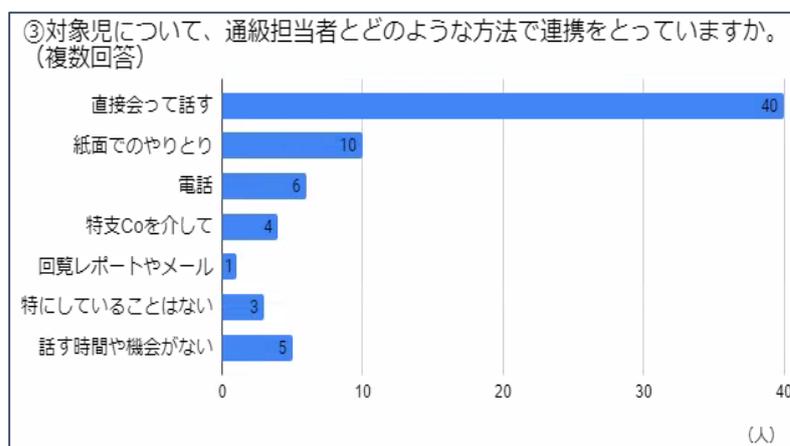


図9 学級担任が通級担当者と連携をとる方法

### ④ 通級担当者と話す時間帯について

結果を図10に示す。

学級担任が、通級担当者と通級による指導の指導内容や対象児の様子について話す時間帯として最も多かったのは、「放課後」であった。次いで、「会った時にその都度」という回答が多かった。つまり、小学校においては、通級担当者が指導を終えて職員室へ戻る17時以降が多く、中学校においては、部活

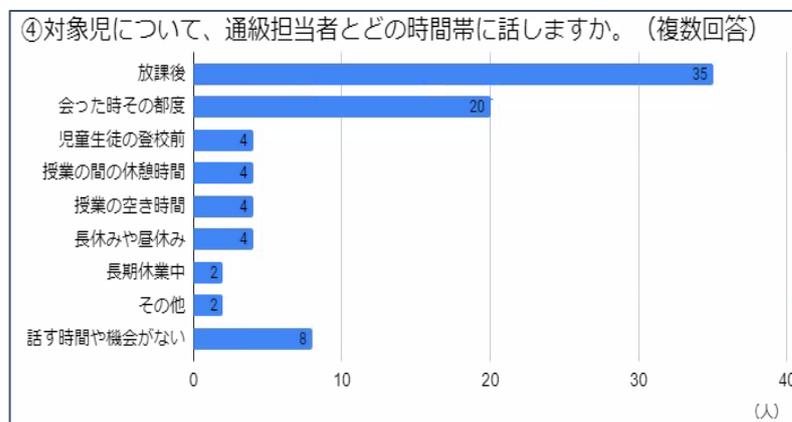


図10 学級担任が通級担当者と連携をとる時間帯

動を終えた後の時間帯が多いことが明らかになった。また、「話す時間や機会がない」と回答した学級担任が8名いた。勤務時間を超えた時間帯に、全ての学級担任が通級担当者と直接会って対象児について話し合うことは難しい。特総研(2018)は、「情報交換・情報共有の機会設定に関する課題」で最も多かった課題を「十分な時間の確保が困難・業務多忙」として報告しており、本市においても同様の現状が推察される。

#### ⑤ 通級担当者と話す内容について

対象児について、通級指導教室での様子を通級担当者から聞いたり、学級での様子を話したりする学級担任が多い結果が得られた。学級担任が、通級担当者と対象児の様子について情報交換したり、情報共有したりすることに重きを置いていることが考えられる。

#### ⑥ 通級による指導の指導内容が通常の学級で生かされているかについて

結果を図 11 に示す。

61.1%の学級担任が「生かされている」と回答した。その理由として、「対象児の学習意欲が向上している」「自信をつけることができ、安心して登校できている」「苦手なことが少しずつできるようになってきている」「感情がコントロールできることが増えてきた」などが挙げられた。中には、「緘黙児の支援について、通級指導教室で筆談や iPad での文字入力など様々なコミュニケーション

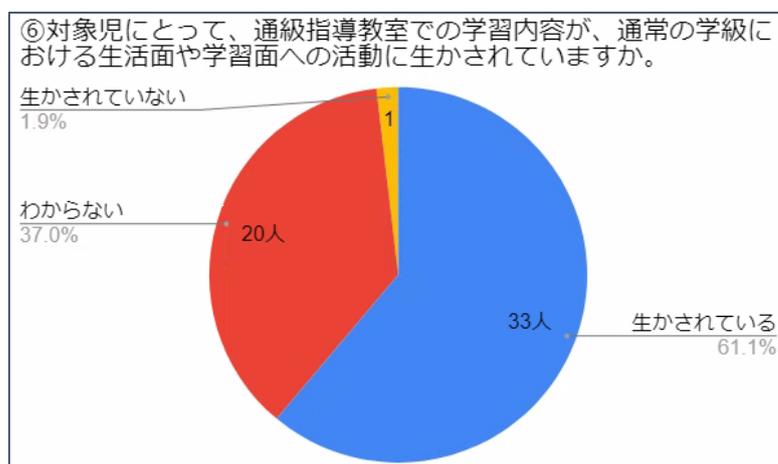


図 11 通級による指導の指導内容が通常の学級で生かされているかについて

の方法を試していただき、それが教室でのやりとりでスムーズに使えるようになった」「通級指導教室で、具体的な場面でのソーシャルスキルをご指導していただいたことから、日常の友人との距離の取り方や会話の受け止め方に変化が見られるようになった」「通級指導教室で学習した内容と似ているものが学級であったとき、その経験を本人が話したり、要領をスムーズにこなしたりすることができている」など、通級による指導の指導内容を学級担任が理解した上で、対象児の変容に気づいている具体的なエピソードも挙げられた。

一方、38.9%の学級担任が「わからない」「生かされていない」と回答した。調査の実施時期が6～7月であったため、「通級による指導を開始したばかりで、まだ対象児の変化をみとりづらい」という意見があった。また、「生かされているのではないかと感じるが、実際に通級指導教室でどんなことをしているのかを把握できていないため、どのような対象児の変化があるのかを理解できていない」という意見が多数を占めた。やはり、前述の通り、通級による指導の指導内容について学級担任が把握していくことが本研究の鍵となると考える。

⑦ 通級指導教室での学習内容を通常の学級で取り入れているかについて  
結果を図 12 に示す。

46.3%の学級担任が「取り入れている」と回答した。取り入れている具体的な内容や活用場面、エピソード等への回答では、「個別での話の聞き方について、『どう思った?』と聞くより、ABの二択にするなど選択方式の方がイメージをもちやすいと通級担当者から教えてもらったので、学級でも実践している」「頑張りカードや怒りメーターの活用など、通級担当者と連携しながら取り組んできた」「予め蛍光ペンでなぞっておき、字を書きやすくするノート指導を学級でも実践している」「通級指導教室の参観をした時に通級担当者がしていた言葉がけや、取り組み方を参考にしている」など、通級による指導で有効だった指導や支援の方法を通常の学級で同じように実践をしていることがわかる。他にも、その指導方法を学級全体の指導の中に取り入れたという例もあった。

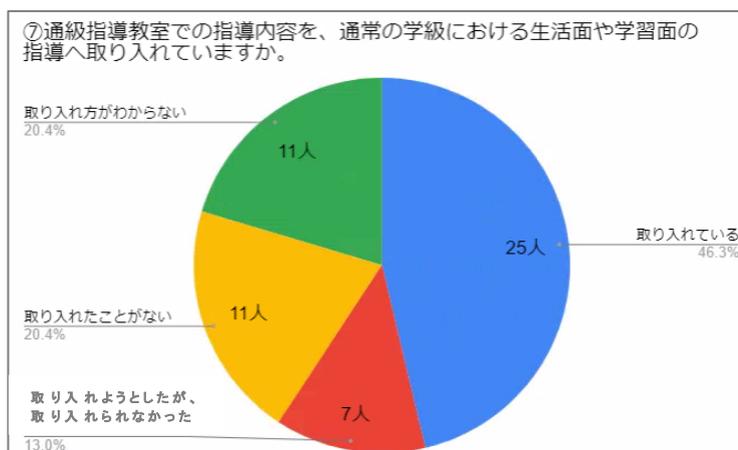


図 12 通級による指導の指導内容を通常の学級で取り入れているかについて

一方、「取り入れようとしたが、取り入れられなかった」「取り入れたことがない」「取り入れ方がわからない」という回答した学級担任が半数を占めた。その理由として最も多く挙げたのは、「通級指導教室での学習内容について、具体的に把握できていないため取り入れられない、取り入れ方がよくわからない」という意見であった。その理由として、通級担当者と話す時間を確保することが難しいことや、実際の通級指導教室の指導の様子を見ることができないことが挙げた。

以上より、通級指導教室での学習内容を学級で取り入れているかどうかは、学級担任によって差がみられ、その要因として、通級指導教室での学習内容を把握しているかどうかが大きく関わっていることが考えられる。

通級指導教室での学びを対象児が通常の学級へとつなげていくためには、学級担任が通級指導教室での指導内容の把握することを通して、学級担任自らが「生かしていく」「取り入れていく」という姿勢をもつことが期待される。そして、対象児が通級指導教室で学んだことを通常の学級で生かしていくことができるように、環境を整えることが学級担任の役割でないかと考える。

⑧ 通級指導教室についてもっと知りたいこと等、自由記述欄について

自由記述の欄への 62 件の意見を、以下の 4 つに整理した。

まず、「通級指導教室での指導・支援の方法をもっと知りたい」という意見が、最も多くを占めた。通級指導教室で行われている特別支援教育に関する専門的な指導・支援の方法を知り、支援の幅を広げていきたいと多くの教職員が望んでいることが明らかになった。

次に、通級指導教室での指導方法を学ぶために、「通級による指導の参観や研修

会をしてほしい」という意見も多く挙がった。

そして、「通級指導教室はどんなことをするところなのか」「どのような児童生徒が通うのか」など、通級指導教室に関する理解を深めていきたいという意見もあった。

さらに、通級指導教室の増設を願う声があり、より一層の通級指導教室への期待の高まりが感じられた。

## 調査Ⅱ：通級担当者への面接調査

### 1 調査の内容

学級担任と通級担当者の連携の実態と課題を明らかにすることを目的として、通級担当者の面接調査を実施した。

- (1) 調査対象者：栗東市内通級指導教室の通級担当者 5 名
- (2) 調査方法：通級による指導の授業参観および面接調査
- (3) 調査期間：第 1 期面接調査 令和 3 年 6 月～8 月  
第 2 期面接調査 令和 3 年 12 月～令和 4 年 1 月
- (4) 調査内容：通級担当者の属性、通級による指導の現状  
学級担任との連携について

### 2 結果および考察

#### (1) 栗東市内通級指導教室の現状について

栗東市内の 5 つの通級指導教室「ことばとまなびの教室」の現状について、以下にまとめる。

表 1 通級による指導の形態ごとのよい点と課題

指導の形態	良い点	課題
自校通級	○学級担任…直接話す機会がある。 ○環境設定…指導に必要な教材・教具がそろっている。	○保護者…送迎の必要がないため、参観が少ない。対象児の様子を伝える機会が減る。
他校通級	○保護者…送迎が必要であるため、出会う機会が増える。参観を通して、対象児の様子を伝えやすい。 ○環境設定…指導に必要な教材・教具がそろっている。	○学級担任…年 2 回の学校訪問の時にしか、直接話す機会がない。特別支援教育コーディネーターを介して学級担任との連携を図っている。
巡回指導	○学級担任…直接話す機会がある。	○環境設定…指導に必要な教材や教具を他校に運び入れる必要がある。必要なものがそろわない。 ○保護者…送迎の必要がないため、参観が少ない。対象児の様子を伝える機会が減る。

5名の通級担当者は、2～3校の指導を担当し、30名を超える対象児の指導を行っている。どの担当者においても、空き時間はほとんどなく、指導の準備や指導記録のまとめ、週1回の通級担当者会や研修への参加等、過密なスケジュールの中、通級による指導を行っている現状が明らかになった。

また、栗東市内の通級指導教室では、自校通級、他校通級、巡回指導の3種の指導形態が行われている。通級担当者との面接調査を通して、それぞれの形態のよい点と課題について明らかになった（表1）。

表1から、学級担任と通級担当者との連携において、自校通級や巡回指導では、両者が直接会って話す機会がもちやすいことがわかる。一方、他校通級においては、両者が直接出会うことがないため、通級担当者が学級担任と直接出会うことができる機会は、年に2回程度行われている学校訪問が重要な時間となるようであった。ゆえに、他校通級において、学級担任と通級担当者との密な連携を図っていくためには、両者をつないでいく特別支援教育コーディネーターの役割や、連携のためのツールの活用が重要になってくるのではないかと考える。

## （2）通級担当者と学級担任との連携の現状について

### ①学級担任との連携における現状

どの通級担当者も、対象児の様子について学級担任と話をすることを最も重要視しているものの、実際に学級担任と話をする時間は通級による指導を終えた時間帯になることが多く、その時間の確保に難しさを感じていることが明らかになった。特に、中学校においては、放課後の部活動後にしか時間の確保ができず、学級担任と話をする時間をとることが大変難しい現状があった。調査Iの結果より、学級担任が通級担当者と話をする時間の確保に難しさを感じていることが明らかになったが、通級担当者も同じ思いを抱えており、両者にとって業務多忙の中、対象児について十分に話し合う時間の確保は、今後の大きな課題だと考えられる。

その中で、通級担当者は、学級担任と対象児について情報共有するために、通信を活用して発信したり、他校の学級担任と電話や回覧レポートにてやりとりをしたりしながら、連携を図っていた。その実践例について、以下紹介する。

### ②学級担任との連携を図るためのツールの活用

図13は、市内の通級担当者が使っている通信である。学級担任や保護者が、通級による指導でどのような指導を行っているか、その指導はどのような力をつけるためか、指導中はどのような様子だったかを把握できるように、通信に記録が残されている。その通信をファイルに綴じて、通信を積み上げている。また、回覧ルートが明記されている通信もあり、通級担当者や学級担任をはじめ、保護者、特別支援教育コーディネーター等が回覧しながら情報共有している例もある。この通信によって、

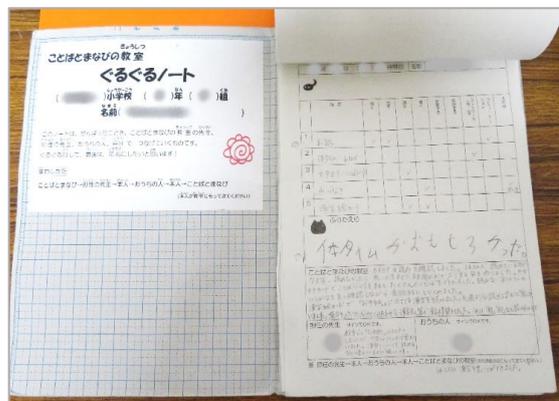


図13-1 通信が綴られた『ぐるぐるノート』（小学校の事例）



また、図 14 は、通信を介して、通級担当者、学級担任、特別支援教育コーディネーター、保護者が、対象児の様子についてコメントを記入したり、対象児に向けて温かい言葉を投げかけたりしている例である。通信の活用は、対象児が周囲の教師や保護者が自分自身のことを見守っていることに安心を感じ、学習に自信をもって取り組む土台へとつながっているのではないかと考える。

ふりかえり

もう やりた と な い と  
思っ て し ま っ た (か らい)

ことばとまなびの教室より  
かけはしの先生やおうちの人のコメントは みんなの応援メッセージが多いよと  
言えと、よく分からない気持ち」「ほめられるのは苦手だから」とコメント。でもうれしいの  
よきと「うれしい」と言っていました。今日の漢字は、iPadの書き方が思ひ通りに反発せず  
トライしてきましたが、何度も挑戦し、さいごはホワイトボードに書くという事で、おうち  
ました。iPadをこわしていた気持ちに、おうちで練習して、おうちでも練習することができた

担任の先生 数字も「やれたい!」と言った時が あるよ。この最終までやりま、 いておきな。と思います この気持ちをこの教員で	特別支援 Co ほめられるのは、ちょっとうれしい ですわね先生もです。でもやっぱり うれしい気持ちになります。iPad おとなで、よく切りかえられおゆ!	おうちの人の おっかね様。11月な気分との折り返しの つた。おっかね様。おっかね様。不安な 気分な気分におっかね様。おっかね様。 おっかね様。おっかね様。おっかね様。
---	--	---

\*かけはしファイルについて\*

【大宝東小】 通級 → 担任 → 子ども → 保護者 → 子ども → 担任 → 特支 Co → 通級

【大宝小・大宝西小】 通級 → 学校(特支 Co) → 担任 → 子ども → 保護者 → 次回の通級に持参

図 14 対象児について関係者がやりとりしている通信（小学校の事例）

一方、通信の活用状況は様々で、回覧がうまく回らなかったり、通級担当者や学級担任等のコメント記入への負担感が感じられたりするなど、通信が有効に活用されるかどうかには課題がみられた。また、通信に記入するコメントをどのような視点で記入していくと、通常の学級での学習面や生活面への活用につながっていくかについて通級担当者が模索している現状も明らかになった。

通信の活用の目的を学級担任が理解しながら有効に活用していくためには、通信にコメントを記入する際の視点を明確にするとともに、通級による指導の指導内容が通常の学級での学習面や生活面の活用へとつながっている例を紹介するなど、通信の有用性についての共通理解を図る場が必要であると考え。そして、学級担任が通信の良さを実感しながら活用していくことができるように、活用方法の工夫の検討が必要であると考え。

### ③ 学級担任から通級担当者への発信の事例

②のように、通級担当者から発信された通信を学級担任が受け取る場合だけでなく、学級担任から通級担当者に向けて、対象児の学級での様子を発信している実践例もある。

例えば、学級担任が、通級担当者に週予定を渡すことによって、通常の学級での学習内容や行事等を発信していることである。毎週の週予定に対象児の通常の学級での様子を付箋やメモに残して、通級担当者へ伝えていく学級担任もいる。通級担当者にとって、週予定は対象児の近況を把握するために大変重要な資料で

ある。また、通級による指導の中で対象児がスピーチをする際に、週予定がスピーチのための題材を探す手がかりとなったりするなど、週予定の果たす役割は大きいようだった。

その他にも、通級担当者とは出会う度に、「〇〇さんは、通級指導教室ではどうですか？」と積極的に通級担当者に話しかけていく学級担任や、通級による指導の前に「〇〇さんは、今日は朝から調子が悪く、長休みに友だちとトラブルがありました。落ち着かない様子で通級に向かいますが、お願いします。」とPHSで連絡をする学級担任などの事例が挙げられた。

連携とは、両者が情報を発信しあい、共有し、ともに対象児の目標に向けて取り組むことであるということを確認できる事例であった。

### 調査Ⅲ：通級指導教室の授業及び通級担当者会の参観

#### 1 調査の内容

通級による指導の現況を把握することを目的として通級指導教室の授業や、市内の通級担当者会の参観を実施した。

- (1)参観実施場所：栗東市内の通級指導教室（巡回指導の場も含む）
- (2)実施方法：通級指導教室の授業及び通級担当者会の参観
- (3)実施期間：令和3年12月～令和4年1月

#### 2 結果および考察

##### (1)通常の学級での活用を目指した実践事例

通級による指導の目的は、障害による学習や生活上の困難の改善・克服を目的として、対象児のニーズに応じて指導を行うことにより、その指導の効果が通常の学級における授業や生活において発揮できるようにすることである。通級担当者は、通常の学級での活用を目指しながら、対象児に応じた指導の工夫を行っている。

図15は、中学校の通級指導教室にて、読むことが苦手な対象児が音声ペンを使ってテストをする様子である。通級による指導



図15 音声ペンを使って学習する様子

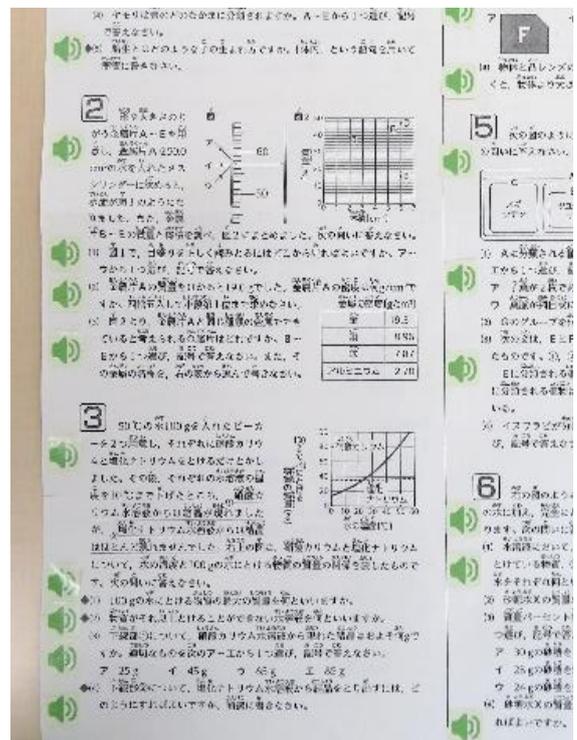


図16 音声ペンを使ったテスト

の中で、音声ペンの使い方に慣れたり、その効果を試したりしながら、通常の学級での活用を目指している。図16は、図15の指導の中で使われていた理科の確認テストである。ルビが打たれているだけでなく、問題文の横には音声ペン用のシールが貼られており、それを音声ペンで押すと問題文が読み上げられる。音声の入力は、通級担当者が行っている場合もあれば、学級担任が入力している場合もある。音声ペンを使うことによって、読むことが苦手な対象児が文意を理解して解答する姿が見られた。図17は、小学校での指導の様子である。音声ペンを使うことで、全ての問題に解答することができ、対象児が嬉しそうに笑う姿が見られた。



図17-1 音声ペンを使って学習する様子

このように、通級担当者は、対象児に応じた指導を通級による指導の中で行い、有効だと感じられた手立てを学級担任へと情報共有し、通常の学級での活用を目指している。実際に、市内の小学校では、通常の学級で音声ペンを使って学習を進めたり、学級でテストを受けたりしている対象児も増えてきている。また、家庭学習で音声ペンを使って音読練習をしている対象児もいる。通級による指導で有効だった指導方法が、通常の学級や家庭へとつながるためには、通級担当者と学級担任がその指導方法を共有し、共に実践を積み上げていくことが重要であり、その環境を整えることで、対象児自身が「自分に合った方法で学びたい」と自信をもって、通常の学級で取り入れていくことができるのではないかと考える。

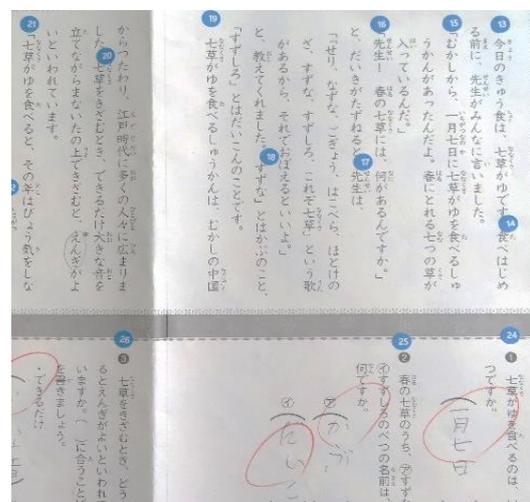


図17-2 音声ペンを使った国語科のプリント

## (2) 学級担任からの情報やエピソードを通級による指導で取り入れた実践事例

調査Iより、学級担任が通級担当者と話す中で、対象児の通級指導教室の様子を聞くだけでなく、学級での様子を話すことに重きを置いていることが明らかになった。その内容は、通常の学級での対象児の変容をはじめ、学習面や生活面で困っている姿、今後予想される課題についてである。通級担当者は、その情報やエピソードを生かし、通級による指導の中で、対象児の困難さを改善していくための指導を進めている。

「給食の配膳中、牛乳を配膳している友だちを手伝いたいと思った対象児が、何も言わずに牛乳をとって配膳をしたことから、友だちとトラブルになってしまった」というエピソードを学級担任から聞いた通級担当者が、通級による指導の

中で、「こんな時、どうする」という授業を組み立てて指導している様子を観ることができた。対象児の気持ちに寄り添いながら、その時の気持ちを振り返ることで、「今度からは、『お手伝いしてもいい?』と友だちに声をかけてから手伝う」と、対象児が自ら気づくことができた。図 18 は、その対象児が SST (ソーシャルスキルトレーニング) すごろくを使って、「こんな時、どうする」について考えている場面である。すごろくを通じて、対象児は場面に応じた対応の仕方を学ぶとともに、「ぼくはあまり言葉で言えないタイプだから、先生に相談する」と自己理解を深める姿もみられた。



図 18 SST すごろくを使って学習する様子

図 19 は、通級担当者が、通級による指導の中で対象児のペースに合わせて漢字学習を進めている様子である。対象児は漢字学習への苦手意識があり、Chromebook を使った漢字学習が進みにくいという学級での状況から、通級担当者は、Chromebook の使い方を指導することに加え、漢字を部分ごとに分けて覚える方法を伝えたり、漢字がもつ意味を説明したりするなど、対象児が漢字を覚えやすい練習の方法を提案しながら指導を進めていた。対象児は、自分に合った学び方で学習を進める姿が見られた。

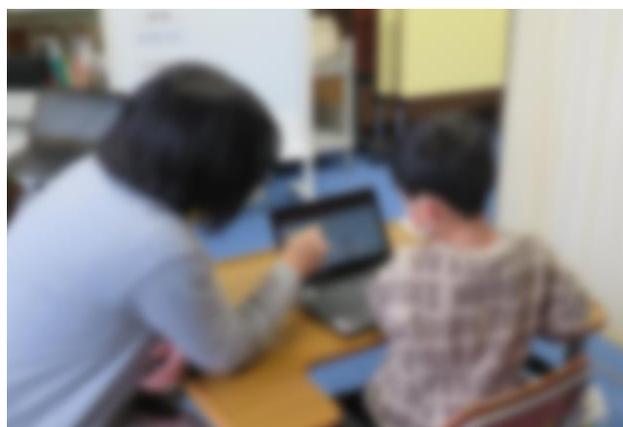


図 19—1 Chromebook の使い方を指導する通級担当者

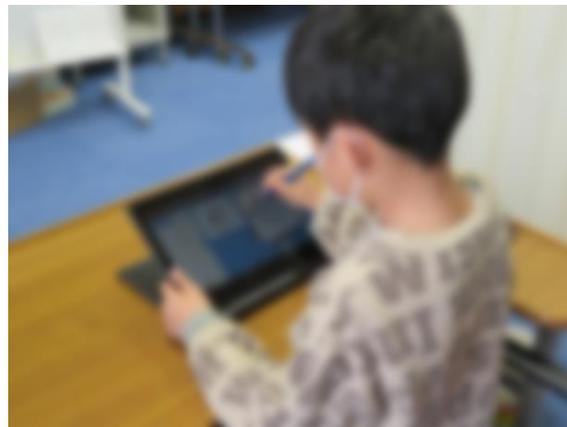


図 19—2 Chromebook を使って漢字学習をする様子

このように、対象児の通常の学級での様子を学級担任が通級担当者へと発信し、通級担当者がそれらを指導へ取り入れながら専門的な方法で改善を図るための指導を行っている事例がある。対象児にとって、学校生活の大部分を過ごす場所は通常の学級である。学級での学習面や生活面で困っていることについて、学級担任をはじめ、通級担当者が改善を図ることができるように支援していこうとする環境は、対象児の不安を解消していくとともに、安心へとつながるのではないかと考える。やはり、学級担任と通級担当者との連携とは、両者が対象児の様子や

有効な手立てについて連絡を取り、協力し合うことであると考える。

### (3) 学級担任の通級による指導の参観

調査 I において、多くの学級担任が通級指導教室の授業を参観したいと希望しているものの、その機会がなかなかもてない現状が明らかになったが、実際の通級指導教室での対象児の姿を参観することで、より対象児の実態把握が深まるのではないかと考える。図 20 や図 21 に、学級担任の通級による指導の参観の様子を示す。学級担任は、対象児の姿を参観したり、授業に参加したりしながら、対象児の様子や実際の指導内容を把握することができた。参観を終えた学級担任からは、学級では見ることができない対象児の一面を発見したり、対象児につけたい力に応じた指導の方法を学んだりすることができたという意見が挙げられた。



図 20-1  
学級担任が通級による指導を参観する様子

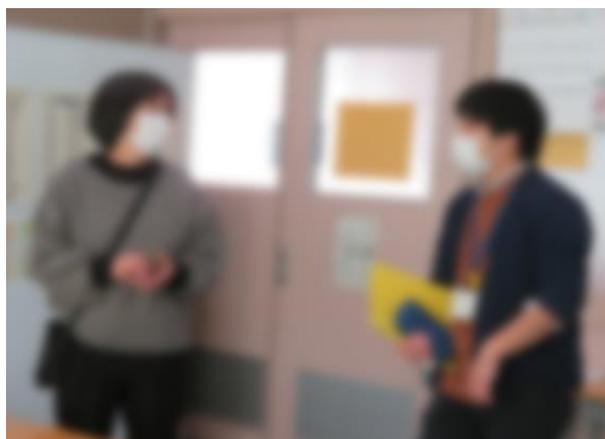


図 20-2  
通級担当者と学級担任が話す様子



図 21-1  
学級担任が通級による指導を参観する様子



図 21-2  
学級担任が授業に参加している様子

特総研（2018）は、学級担任が、通級による指導場面を参観することが活発に行われているとは言い難い状況であることを指摘している。しかし、同調査において、通級による指導場面を参観したことが「ある」と回答した者に限定すると、「通級による指導の指導内容の通常の学級における生活面や学習面の指導への活

用」が「十分に生かされている」または「生かされている」と回答した割合が 84.3% にのぼり、それらの結果から実際に通級による指導場面を参観することで、通級による指導の指導内容を、どのように通常の学級における生活面や学習面への指導へ活用したらよいかイメージしやすくなると報告している。

実際に、通級による指導を参観している学級担任を観察すると、参観中に対象児の様子をメモする姿がみられた(図 22)。そして、参観を終えた学級担任は、そのまま通級指導教室に残って通級担当者と対象児の様子を話し合い、「参観を通して、学級で学習したばかりの漢字はよく読めていたけれど、少し前に学習した漢字は忘れてしまっていることに気づきました。また、学級で復習したいと思います。」や、「〇〇さんは、語彙が少ないのかなと思いました。今日見た指導方法を学級でもみんなで作ってみたいと思います。係活動でも、本係さんに絵本を紹介してもらったり、読み聞かせをしてもらったりするなど、語彙が増える活動が広がったらいいなと感じました。」と話した。

このことから、通級による指導の指導内容を通常の学級での授業や生活に生かし、対象児の学びをつなげていくために、学級担任が通級による指導を参観することは、大変有効であると考えられる。



図 22 学級担任が通級による指導を参観する様子

#### (4) 通級担当者間の連携

市内通級担当者は、週に 1 回の通級担当者会を行い、通級による指導の様子を互いに参観しあったり、事例紹介を通して指導の検討を行ったりするなど、特別支援に関する専門性を高めるための研修を行っている。

また、栗東市発達支援室の発達支援アドバイザーが通級指導教室を訪問し、授業を参観することを通して指導の助言を行ったり、通級担当者とともに対象児のみとりを行ったりしている(図 23)。

その他にも、就学前の「幼児ことばの教室」の担当者との合同会を行い、就学前から小学校、小学校から中学校、さらに中学校卒業後の進路の流れについて情報共有をするなど、切れ目のない支援や縦のつながりも大切にしながら、日々の実践に当たっている。

市内の通級担当者は、互いに実践を交流し、よりよい通級による指導のために研修を重ねている。その特別支援教育に関する専門性は、教育現場において重要な資源であると考えられる。また、担当者間がつながり合いながら、協働的に教育実

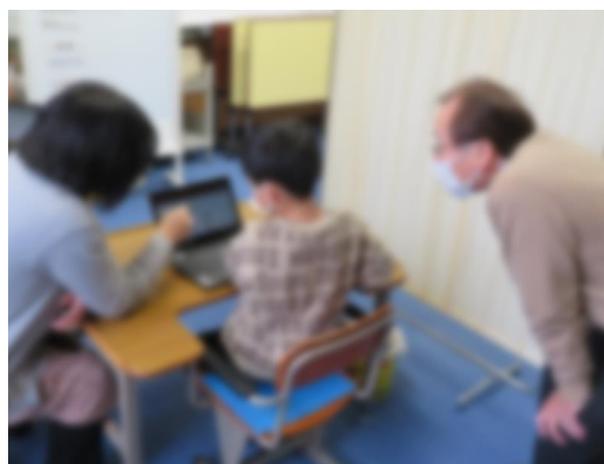


図 23 発達支援アドバイザーが通級による指導を参観する様子

践を積み上げていくことは教育に欠かせない姿勢である。本研究の「教師がつながる」視点において手本となる連携の在り方であると考える。

## Ⅶ 全体考察

### 1 調査Ⅰを通して

栗東市内の多くの教職員が、「通級指導教室での指導・支援の方法を知りたい」「通級指導教室はどんなことをする場所なのかを知りたい」と感じているものの、通級指導教室の授業の参観経験のない教職員が少なくない現状が明らかになった。通級担当者の専門的な特別支援教育に関する指導・支援の方法から学ぶ機会を増やすために、今後、参観の機会の設定や研修の工夫を行うことについて検討していきたい。全教職員の通級指導教室についての理解推進を図っていくことが、本研究の基盤となるのではないかと考える。

また、学級担任と通級担当者との連携の現状として、学級担任が、通級担当者と対象児について直接会って話すことを重要視しているものの、業務多忙な中、その時間の確保は容易なことではないことが推察された。本研究の目的である通級指導教室での学びを通常の学級へとつなげていくためには、学級担任が通級指導教室での指導内容の把握することを通して、学級担任自らが「生かしていく」「取り入れていく」という姿勢をもつことが期待される。ゆえに、通級による指導の指導内容について学級担任が把握し、通級による指導で有効だった指導や支援の方法を通常の学級へ取り入れていくための方策を検討していく必要がある。

### 2 調査Ⅱを通して

栗東市内のどの通級担当者も、対象児について学級担任と直接会って話すことを最も重要視しているものの、その時間の確保に難しさを感じていることが明らかになった。調査Ⅰの結果と同様であり、学級担任と通級担当者は同じ思いを抱えていることがわかった。両者にとって、対象児について十分に話し合う時間の確保は今後の課題であり、特に、両者が直接出会う機会がない他校通級においては、それにかわる方策が必要であると考えられる。

その課題を改善するために、通級担当者は、通信、電話や回覧レポート等のツールを利用することを通して、通級による指導の指導内容や対象児の様子を学級担任へと発信していることも明らかになった。今後、ツールの有効な活用を目指し、その有用性についての共通理解を図る場が必要である。そして、学級担任がその良さを実感しながら活用していくことができるように、活用方法の工夫が必要であると考えられる。

また、学級担任から通常の学級の対象児の様子について通級担当者へ発信している事例も挙げられた。通級担当者からの発信だけでなく、両者が情報を発信し、共有し合うことを通して、対象児のめざす姿に向かって共に取り組んでいく姿勢は、本研究のめざす担当者間の連携の在り方であると考えられる。

### 3 調査Ⅲを通して

通級による指導で有効だった指導方法が、通常の学級へとつなげるためには、学級担任がその指導方法を把握し、対象児が通常の学級で生かすことができるよ

うに環境を整えることであると考え。対象児にとって、学校生活の大部分を過ごす通常の学級で、「自分に合った学び方で学びたい」と自信をもって過ごすことができるように、学級担任と通級担当者がつながり合いながら、対象児のめざす姿を共有し、その姿に向かって、それぞれの場での指導・支援の工夫を進めていく必要がある。

また、本研究において、通級による指導の指導内容を学級担任が把握していくことが重要であるが、把握するための最も効果的な方法は実際の指導の様子を参観することであると考え。通級指導教室で実際の指導方法と対象児の様子を直接見ること、それを通常の学級に「取り入れる」ことへのイメージがわき、即実践へとつながりやすいのではないかと考える。ゆえに、学級担任が通級による指導を参観することは、大変有効であると考え。

## Ⅷ 研究のまとめ

### 1 研究の成果

- (1) 栗東市内の教職員全体へ質問紙調査を行ったり、市内全ての通級指導教室を訪問し通級担当者と面接調査を行ったりすることを通して、市全体の通級指導教室の実態を把握することができた。教職員への質問紙調査を通して、栗東市内の教職員が特別支援教育に関して高い関心を持ち、積極的に実践を行っている現状が示唆された。また、市内の通級担当者間がつながり合いながら研修を重ねている意識の高さに感銘を受けた。栗東市全体の特別支援教育に対する関心の高まりとともに、研究を通してより一層の特別支援教育の充実に寄与したい。
- (2) 1年次の研究では、学級担任及び通級担当者の両者の調査を進めることを通じて、それぞれの立場からの現状を把握することができた。また、両者が対象児について直接会って話すことを最も重要視しているものの、その時間の確保に難しさを感じていることが明らかになり、同じ思いを抱えていることが明らかになった。今後、「教師がつながる」という視点から課題の改善を図る中で、両者どちらにとっても有効な手立てや改善策を提案していきたい。
- (3) 本研究の要である学級担任と通級担当者の連携において、具体的な実践事例を通して、「教師がつながる」視点を整理することができた。本研究において、学級担任と通級担当者の連携とは、「対象児のめざす姿を学級担任と通級担当者が共有し、その実現に向けて、それぞれの役割を果たしながら、対象児の様子や有効な手立てについて連絡を取り、協力し合うこと」と整理し、今後の研究を進めていく。

### 2 今後に向けて

- (1) 2年次の研究では、1年次に明らかになった結果をもとに、課題を改善するための方策として次の3つの方策について検討していく。①通級による指導の参観の設定、②通級指導教室の理解促進のための研修の設定、③学級担任と通級担当者の連携を支えるためのツールの活用の3つである。業務多忙のため、

参観や研修の機会がなかなかもつことができない現状も踏まえ、昨年度から教育現場に導入された Chromebook を連携のためのツールとして活用していくことについて検討していく。

- (2) 1年次の研究で整理することができた「教師がつながる」視点から学級担任と通級担当者の連携の在り方を提案するとともに、担当者間が連携を図ることによって、対象児の学びのつながりがうまれているかを検証していく。そのために、協力校にて(1)の方策を実践するとともに、通常の学級での対象児の様子を観察することを通して「子どもの学びをつなぐ」視点について整理していきたい。そして、「教師がつながる」ことを通して、「子どもの学びをつなぐ」実践事例を収集し、対象児がより一層安心して学校生活を過ごすことができるように努めたい。

## IX 引用文献・参考文献

国立特別支援教育総合研究所(2018)『特別支援教育における教育課程に関する総合的研究ー通常の学級と通級による指導の学びの連続性に焦点を当ててー』

国立特別支援教育総合研究所(2018)『小学校・中学校 通常の学級の先生のための手引き書ー通級による指導を通常の学級での指導に生かすー』

滋賀県教育委員会(2019)『特別支援教育の視点を生かした授業づくりヒント集』

滋賀県教育委員会(2021)『滋賀の特別支援教育』

田中裕一(2019)『「特別支援学級」と「通級による指導」ハンドブック』

栗東市・栗東市教育委員会(2021)『第Ⅱ期栗東市特別支援教育推進計画』

### 研究協力

栗東市 通級による指導の担当教員	葉山小学校	森本	陽子
	治田小学校	平野	亜希子
	治田西小学校	涌嶋	真理
	大宝東小学校	栗野	有里子
	葉山中学校	清水	恵子